
未薔樹

庵あん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未薔樹

【Nコード】

N0512Z

【作者名】

庵あん

【あらすじ】

かの死神ヘルメスも、そのクロツカスの花の様な笑顔を愛したのだろうか。

(前書き)

芋ニ似テ 大キナル根茎ヲ有シ シバシバ五又ニ分レテ
小児ホドノ大キサニナル 山中ニ自生ス

マレニ 大人ホドノ丈ニ成長シ 手ヲ振りテ
村民ヲ招クト云フソノ姿 人ニ似タルヲ以テ
人似草ト云ヒ

村民ヲ 気味悪ガリ見ツケ 取りテモ
食ウ事ナシ

室井恭蘭 『妖魅本草録』より

春風は、目覚めを誘った。

開け放った窓から吹き込む、噎せ返る様な緑の息吹を伴った、冷たく、しかし、どこかあたたかい風。その生命を運ぶ風を浴びる度に、碧い葉を小さく揺らして、彼女は悦びを表している様に見えた。そう、何より彼女はこの風を愛していた。いつも彼女という私から見れば緩慢な変化ではあるが、その蕾も膨らみ始めている。五月雨が降る頃には、その花は咲いているだろうか。その花は彼女に似た、美しい色彩の花に違いない。まだ肌寒い三月の、芽が出たばかりの頃は、あんなに小さかったというのに。月日のうつろいは、その近くにいると遅く感じて仕舞うものかもしれない。しかし、振り返って見れば、早いものだ。

いとおしく。白い肌に浮かび上がる、青い葉脈をなぞった。

確かな、温度と脈動が感じられる。

生まれつき彼女は身体が弱かった。外で跳びまわることも、学校で友達をつくることも、病弱な彼女にとっては叶わぬ夢で、幻想で私はそんな彼女に、外の世界で出逢った事象を直向きに語ることしか出来なかった。花に水を注ぐ様に。彼女にとって御伽噺に近いであろう私の話を聞いて、彼女は楽しそうに微笑んだ。けれど、その度に彼女は口にする。私も見たいなあ、と。四角い窓の外を、ぼんやりと眺めながら。

そんな彼女は植物を愛でた。

彼女の家の中庭に造られた硝子張りのバラ園は、唯一、彼女が生命と戯れることができる場所だった。彼女は本から得た植物の知識を、そこで実践していた。いつしかそこにはバラだけでなく、様々な種類の植物が根を伸ばす小さな植物園と化した。不気味な形態の食虫花も、可憐な百合も、ずんぐりとした霸王樹も、等しく、夥しく。蔦を伸ばす、葉を広げる、花を咲かせる。

その頃になると、彼女はすっかり明るくなっていて、語り手も私ではなく彼女が務めるようになっていた。身体は病弱なままだったけれど……。

いつも、彼女が語るのは植物に纏わる幻想譚。

例えば、動物と植物の特徴をあわせ持った幻獣バロメツツ。

韃靼羊、或いはタートル羊とも呼ばれるその幻想の中に生息する生き物は、黄金の羊毛に全身を覆われた羊の姿をしている。脚の替わりに四、五本の茎で立ち、狼に襲われると真っ赤な血を流すと謂う。そして、自らの流した赤い血で緑の森を育むのだ。十四世紀に芽吹いたこの新しい幻想の芽は、その正体を羊歯植物の根茎だとする学説が十八世紀に入って発表されると、瞬く間に摘み取られてしまったらしい。今では、当時の欧人の勘違いで、バロメツツの根源或いは、スキタイの木　は木綿だったとされている。

そんな植物に纏わる幻想譚にも彼女は詳しかった。異様な程に。こわい、と????いながらも、彼女の黒い瞳は、爛々と輝いていた。まるで、幻想の中に深く根を張る植物の毒にあてられた様に。

そして、ある冬の日、木枯らしが吹く頃。

白い雲の隙間から空の蒼が覗く、ちぐはぐな空の下。

緑のまばゆい、硝子に守られたこの植物園の中で、ひっそりと、彼女は私に尋ねた。

「ねえ、人似草って知ってる？」

「ヒトニグサ？」

「人似草はね、人間の死体に根付いて、それ養分として育つ植物よ」

「何か……、怖いお話しだね」

「それだけじゃないわ。何でも人似草は自分が養分を吸った人間と同じ姿に育つらしいの。それでね、成長すると養分を求めて動きまわるのよ。死者の姿で。それで、もし、その肉を食べて仕舞ったら、正気を失って死ぬと謂われているわ」

「動く植物って何か不思議だね、植物なのに、動きまわるなんて」

「動きまわる植物という特性は珍しいものじゃないの。ヨーロッパの伝承に生息するマンドレイクに、その亜種でグリム童話に生息するアウラウネもいるわ。でもね。私が気になったのは、人似草が死者の姿に成長するところ。冬虫夏草なんかは蛾の幼虫に寄生して養分を得るのだけれど、幼虫の姿にはならないもの」

「あ、そう言えば、何かの映画で観たマンドレイクも酷い顔してたっけ……」

「あら、マンドレイクならそこに生えているわよ」

小さな紫色の花を見つめながら、彼女は語ってくれた。

そのナス科マンドラゴラ属の植物は、別名をマンドラゴラと云う。その起源は古く、ツタンカーメンの墓にその栽培法が刻まれているほどだ。マンドレイクの根には数種のアルカロイドが含まれており、鎮痛剤や鎮静剤の原料とされていた。しかし、毒性が強く、服用すれば幻聴や幻覚、嘔吐などを引き起こし、死に至る場合もあった。そのため、現在ではマンドレイクが薬として使われることはない。

マンドレイクの持つ副作用が、伝承の中の、マンドレイクの悲鳴を聞くと正気を失って死んで仕舞うという言い伝えに繋がるのだろう。まだ現在よりも科学が信仰されていない時代、錬金術や魔術が盛んだった頃には、不老不死の霊薬の原料として挙げられていたの

だと謂う。

「マンドレイクの伝承も、確かに魅力的ではあるわ。でも、人似草には勝てないのよ」

「どうして？」

「だって、素敵だと思わない？ 死者と同じ姿になるだなんて。昆虫が植物に擬態することはあっても、植物が昆虫を真似ることは珍しいわ。ましてや死者に擬態するのよ。人似草は、声も、性格も、死者に似るのかしらね」

ふわり、と彼女は、白くか細い指先でマンドレイクの花を撫でる。その時は、不気味としか思えなかった。ヒトニグサの囁も、マンドレイクの囁も、薄く艶やかな唇を震わせながら御伽囁を語る彼女も。その姿は、いつになく楽しそうだったから。

ある夜、その恐怖は希望に変わった。

彼女の部屋で見つけた数冊のノートにはヒトニグサについての、彼女の研究成果が記されていた。それと共に、実験のために彼女の母親を手に掛けて仕舞ったこと、その実験は失敗で出来損ないのヒトニグサになって仕舞ったこと、自分が志し半ばで死んで仕舞うかもしれないこと、それらに対しての贖罪の言葉と、後悔の日々と、心残りが綴られていた。そして、私に研究を引き継いでほしいという願いも……。

随分と長い間、その、彼女に瓜二つな青白い寝顔を見つめていたような気がする。

そう言えば、患者の軀に纏わりつくチューブを医療関係者が^{アイビー}薦と呼んでいることを教えてくれたのも、目の前のベッドで眠る彼女だ

った。

彼女の残した、ノートのページをゆつくりとめくる。どうやら、ヒトニグサというのは条件が合わなければ人の姿になるまで成長しないらしい。また、もし、死者の姿にまで成長したとしても、動き回ることができるのは僅かな時間のみかもしれないと……。

しかし、それでもよかった。

私は信じ続けていたのだ、あの御伽噺を。私は切望していたのだ、その実現を。私は待ちわびていたのだ。この瞬間を。

ただ純粹に。

生前のままの、彼女の姿に成長した、その植物が、否、彼女が、眼を開ける、この瞬間を。

同じ胚を分けた、姉妹として。

「ねえ、聞こえる？　ねえ、見える？」

「ええ」

「良かった……。私、頑張ったよ、お姉ちゃん」

「知ってるわ。本当にありがとう」

私をやさしく包み込む彼女の細い腕も、匂いも、声も、あの頃のままだった。

そこには、あの頃よりも完璧な姉が咲いていた。凜、と笑って。

薄紅色の桜は散って、その花片を洗い流す様に、五月の雨が降る。この硝子張りの苗床の中でも、その匂いは、その色彩は、その雨音は強く感じられた。

それからの日々は瞬く間に過ぎ去った。

幸せだった。あの頃みたく。彼女はクロツカスの花の様に、笑った。かの死神ヘルメスも、その笑顔を愛したのだろうか。その夢みたく、華やかな、薔薇色の日々の中で。たとえ、自らの婚約者が花となつて仕舞つても……、彼は、否、彼女は信じ、待ち続けたのだろうか。

木枯らしの吹く頃。

姉は笑っていた。

恐らく、これからもずっと。この笑顔が枯れることはないだろう。今は、ただそれだけを願っている。

彼女の中で根を張った私の片方の腎臓が、これからも、ずっと、いつまでも、強く脈打つことだけを

「お姉ちゃん、はやくー」

「待ちなさいって。私はあなたと違ってデリケートなのよ」

「はいはい。わかってるって」

信じている。

クロツカスの花言葉の様に。

未薔樹

The S a d i s t i c L o v e S o n g

是に於て了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0512z/>

未薔樹

2011年12月1日22時50分発行